

平成24年度鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター所員研修(学内公開)

日本の近代化に果たしたキリスト教の役割

基調講演 「森有礼と新島襄

—幕末留学生によるキリスト教の受容とその展開—

鹿児島純心女子大学副学長 犬塚 孝明

日 時:2013年2月20日(水) 16:00 ~ 17:30

於 :キリスト教文化研究センター

おことわり

本講演中には資料への言及、参照箇所の指示等が度々行われていますが、配布資料は量も多く、また資料が手許になくとも論旨の理解には支障がないように話を進めているので、文字化に際して資料を末尾に加える必要はないとの講演者の意向で、講演のみ掲載していますのでご了承ください。

(主催者)

はじめに

学生のゼミでもないし、学会発表でもないし、講演でもないという、こういう形でこの大学で話をするのは、初めてです。私自身が少し勉強しなくてはと思って、改めて今回こんなレジュメを作らせていただきました。何か、疑問等ございましたら、ご遠慮なく、途中でも結構ですので質問をしていただければと思います。それでは、これから、1時間ちょっとぐらいになりますけれども、お話をさせていただきます。一応、題としては、「森有礼と新島襄」ということで、今、先生からお話がありましたように、新島襄を取り上げたのは、一つには、ちょうど大河ドラマで新島八重(山本八重)の話を見ておりますので、その大河ドラマも少し加味して。

森有礼というのは、私自身のライフワークとして40年近くやって、今でもまだ全集編纂途中の人物でありますけれども、なかなかこれもつかみがたい、捉えどころのない人間なんです。初代文部大臣で有名ですけれども、若い頃の森という人物はキリスト教とは切り離せない人間ですので、その辺りも含めて新島襄とも非常に密接な関係があるので、少しお話をさせていただこうと思っております。

ですから、サブタイトルは、幕末留学生、二人とも幕末に留学をした人ですので、彼らによるキリスト教の受容というのは、どういう形で行われたのかということをお話させていただこうと思っております。今回のセミナーも大きなテーマが「日本の近代化に果たしたキリスト教の役割」ということですので、そこをポイントにしながら話をさせていただこうと思っております。お手元の本が、一応、森の資料と新島の資料。森のほうの資料は15年も前に、当時の文部省の国立教育会館という所で二回に渡って講

演をした、文部省の要請で教育者を相手にしたものの一部をちょっと省略して重要なところだけ、コピーをしました。

それから、新島襄のほうは、有名な『新島襄の生涯と手紙』という、全集の10巻目にありますもの、同志社が訳したものです。ここにあります*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*というのが本来の題名で、これを訳したものでございます。その2つを使いまして、お話をさせていただこうと思います。

## 1. 幕末における米国系宣教師の活動

それで、まず、レジュメのほうの一番目で、どの程度時間の中で話ができるかわかりませんが、重要なところは少しポイントを絞って時間をかけたいと思います。一番目の幕末における米国系宣教師の活動についてですが、実はこれは、まず日本の人たちがプロテスタントにどういうふうに入っていったのかという部分をお話させていただこうと思うんです。ご存じのように1858年、安政5年ですけれども、ペリーが来て、その後ハリスがやってきまして、日米修好通商条約が結ばれます。それが1858年でございます、その1858年に結んだ中に第8条というのがあります。その中に、日本にいるアメリカ人の信仰は自由であるということで、礼拝つまり教会を建てることも自由であると。その保護を日本人はしなければいけないというようなこととか、踏み絵は当然廃止ですと書いてあるんですけど、踏み絵が廃止というのは、既に1855年にオランダとの日蘭和親条約の中で廃止という項目ができておりますので、一応アメリカとの条約では踏み絵の廃止というのは、もういらないということになりまして。基本的には、アメリカ人の信仰の自由と、拝礼所の建設は許すということを謳っています。そこから実は、プロテスタントの教義が入ってくるということになります。

翌年の1859年に、実際、横浜、長崎、函館で貿易が始まるんですけれども、それに伴って大勢の外国人が入ってまいります。そこで、宣教師がこれから、アメリカ人、外国人のために、とにかく宣教師を多く派遣せよということを要請するようになります。特にアメリカが一番乗りだったものですから、外国伝道局に対して宣教師の派遣を要請すると、それに対して公然と日本に上陸をする宣教師たちがやってくるわけがあります。

実はここに書いた四人が主だった人たちでございます。ご存じの名前もあると思いますけれども、ブラウンというのは、改革派教会(Reformed church)です。Reformed church in Americaという、日本人にもすごく密接な関係を持つ会派で、ここの改革派教会の本部がニューヨークにあるんですが、その本部の総主事というのがフェリスといいまして、そのフェリスの名前を取ってフェリス女学院ができあがるというような、いわゆる横浜バンドといわれる、横浜を中心とするキリスト教の会派です。これ

が改革派教会。もう一つ、改革派教会の重要なのは、長崎にあるんですけども、これもフルベッキという改革派教会の宣教師が長崎を根城に宣教活動を始めた。

ここに記した四人は全部1859年に日本に上陸した宣教師です。ですから、先駆者です。今のプロテスタントのアメリカ人の宣教師としては先駆者になる人たちです。二番目のヘボンというのは、ヘボン式ローマ字でご存じのとおり、これは長老派教会でPresbyterian churchといいます。日本では、明治学院がこのヘボンの系統になっております。それからウィリアムズというのは、日本では監督教会とも聖公会とも呼ばれた、Protestant Episcopal churchに属する宣教師なのですが、立教学院を創立した人です。

フェリスにしろ、明治学院、立教にしろ、だいたい明治10年より前に、明治の初期に設立されるところです。それからフルベッキ。この人はもう、いろいろな意味で、いろいろな所に出てくる。長崎で活躍をしたんですが、その後東京に出てまいりまして、東京大学の前身であります東京開成学校というところで英語を教えたりしますし、それから長崎時代の大隈重信であるとか、そういう人たちを教えて、政府の顧問的な役割を担った宣教師になります。それから、ちょっと遅れてんですけども、この後に、これは新島襄と非常に関係が出てくる会派なんですけども、ここに書いてありませんけれども、会衆派教会というのがありまして、これはCongregational church と呼んでおります。これが実は新島の属した会派なんですけども、この会衆派教会というのが、米国伝道会社というのをつくってございまして、その米国伝道会社、まあこれは会社じゃないですけど、一応、日本で、こういうのは会社と訳していますけども、そういう教会がありまして、その伝道会社というところの、とにかく各国に行って伝道するという、アメリカの非常に重要なポストを担うんですが、ここにあるグリーンという、会衆派ではグリーンという宣教師が一番最初に神戸にやってまいります。

従って、神戸は開港後ですので、神戸というのは慶応3年ですから、ちょっと遅れて開港いたします。グリーンという人が中心になって神戸を根城に会衆派が宣教活動を行っていくということになります。実は、この会衆派教会というのは、後に新島が同志社をつくるときの重要な会派になるわけです。新島が明治7年に帰ってまいります。で、明治8年に同志社を建てますもんですから、そこで会衆派は非常に大きな勢力となって神戸を根城にしたんですけども京都で活躍をするということで、実は、その新島の同志社に入ってくるのが、熊本の一派、ジェーンズという人が熊本で教えを広めたので熊本バンドと呼ばれてます。この人たちが同志社にやってきます。それによって同志社が会衆派の一つの大きな学校となっていくんですけども、いずれにしても、こういうふうな、開港の直後は、この四人の人間と三つの会派が中心で、後にちょっと遅れて、この会衆派が出てくるという形になります。

このヘボンもブラウンも、実はヘボンというのも横浜で活躍をする人で、後にブラウンと協力をして新約聖書、旧約聖書の翻訳をする人たちです。ですから、ブラウンは最初の委員長として、明治5年ですか、新約聖書を翻訳していくことになります。このブラウンという人は、話をすると長くなりますが、薩摩藩の留学生とも非常に大きな関係を持つ人であります。第二次の薩摩藩の留学生の世話をしてアメリカに渡すという役割も担った人なんですけど、その辺りはちょっとまた話が飛びますので省略をいたします。

この4人によって、とにかく広められていったということをお分かりいただけたと思いますが、実は、この幕末の米国の宣教師の活動というのは、今、申し上げましたように1859年に上陸をしてから始まりますんですが、プロテスタントの歴史の中では、明治14年(1881)年が、だいたい、プロテスタントキリスト教の移入の時期であろうということになっています。プロテスタント史の専門家が何人かいるんですけども、大内さんという方によると、第一期、二期、三期と分けまして、第一期、その1859年から1881年までがキリスト教の移入された時期であって、それから第2期、それ以降が教会の建設であるとか発展であるとかいう時期につながっていくんだという話になります。とにかく、そういうふうな形でした。

プロテスタントの教会そのものは、明治5年が最初に承認されるというか、教会の設立ということに対して各会派が集会を開いて決めていくという感じでございました。もう一つ重要なことは、ただ、この宣教師たちは、最初から宣教活動したのかというと、そういうことではないんです。実は、宣教師たちがやったやり方というのは、日本人にまず接触することです。当時の幕末の日本人たちというのは、洋学、西洋の学問がとにかくしたくてしょうがないわけです。英語も学びたいとか、そういうの、ありますよね。ですから、いわゆる洋学という西洋の学問ができるんだということが魅力で若者たちが、この宣教師に近寄ってまいります。そこが彼らの非常に大きなメリットというか、うまく利用するところです。日本人にそういう形で接触して、「どんどん英語も、いろんなことを教えてあげますよ」ということで、例えばヘボンという人なんかは、もともとお医者さんです。このヘボンというのは、すごいエリートなんです。プリンストン大学を出て、その後ペンシルバニアの医科大学を出まして開業までした人なんです。その後、宣教活動に入りまして、シンガポールから始まって医療伝道という形で行く、非常にエリートの人です。ですから、こういう人たち、いろんな法律も知っていれば、文学も知っていれば、それから今言ったような医学であるとか、音楽であるとか、さまざまなことを知っている宣教師たちですから、彼らに接触することによって、あらゆる西洋の学問を、彼らは学ぶことができるということで、自分の方からも日本人からも行くというようなことでありました。

そうして、宣教、両方両得ですよ。日本人としては、そういう学問ができるということ、宣教師にとっては自分たちの宣教活動を非常にやりやすい形というか人間成長にとっても大事な形で宣教できるというような、そういう両方の歩み寄りがうまく一致したということだと思います。しかも明治維新という時代ですから、若者たちはいろいろなものに興味を持って、とにかく学ぼうという姿勢を持っています。それから、もう一つは、やっぱり新しい日本をつくっていくんだという気持ちがみんなに満ちているわけです。とにかく新しい日本をつくるためにはどうしたらいいのかということで、新しい日本のためには、やっぱり、そこに生きる人間あるいは国民そのものが新しく生まれ変わらなくてはいけないだろうということで、そこに生きる人間の精神というものを改革しなくてはいけないだろうとか、意識を改革しなくてはいけないだろうということを、少なからずみんな思っているわけです、若い人たちが。

その中で、たまたま、キリスト教に出会った人たちが、ここに本当に新日本の誕生を支える精神があるのではないのかというふうに感銘を受けた人が何人も出てくるわけです。ですから、そういう洋学という彼らの現実的な要求と、それから、もう一つは、それにちょうど載っかってきた形で精神上的キリスト教というのがうまく一致する中で、幕末のキリスト教の移入と、それから日本の国家の形成というような二つの面が結び合っていくというふうになるものだと思います。こうして一応、日本では宣教師を通してキリスト教というものが入ってまいりますということを、まず、申し上げておきます。

## 2. 森有礼の英国留学とキリスト教

次に、二番目にまいりますと、森有礼なんですけれども、この森というのは、どうしてキリスト教と出会っていったのかという問題です。ここにいきたいと思います。森有礼はもう皆さん、ご存じのとおりであります。森が留学をしたのが、1865年でございます。薩摩藩の留学生で中央駅前の銅像の何番目でしたか、ちょっと、どこかが森なんですけど。ちゃんと分かるようになってるんですね、あれ。これが森で、これが長沢で、これが誰だって一人ずつ名前が付いてるんですけども、ちょっとどれだったか忘れたんですけど。その十九名の留学生の中の一人として1865年にイギリスに渡ります。実は、この森という人のキリスト教との出会いは、非常に衝撃的でした。それを皆さんにちょっと資料をご覧になっていただいていると思いますから、開いてみますけども、最初の部分。一枚目のところに史料三というのがございます。航魯紀行といまして、1865年にイギリスに着きまして、翌年の1866年の紀行文なんです。日記なんです、これは。魯というのはロシアのことです。夏休みにロシアに旅行に行くんです。日記そのものは、すごく面白いんですけども、ここでは主題をキリスト

教だけにちょっと絞ってお話をいたします。

森と松村という友だち二人で8月1日にロンドンを出発します。船が出るのがニューキャッスル・オン・タインという有名な所でございますけど、今は工業都市として有名ですが、造船も盛んです。そこで過ごす、一週間ほど船待ちをするわけです。その船待ちをするというのは、森と松村というのは薩摩藩から派遣されたときは、海軍学の勉強に行くんです、イギリスに。薩英戦争後ですから、薩英戦争のときに痛い目に遭った薩摩は、どうしてもイギリスの海軍を学ばせるのだと、若い人に。そういうことで派遣されるわけで、彼らは航海学としての海軍を学ぶために来てるんです。その実地訓練もあって、ニューキャッスル・オン・タインから、帆の船ですね、帆船に乗ってロシアに向かうんです。これがすごく面白い旅なんですけども、マストに登ったり、さまざまな活動をするんですが、その船待ちをしているときに、ある体験をするんです。これがすごく面白いんです。

どういう体験かといいますと、泊まるわけです、宿屋に。そこに泊まりましたら、ミリーという五十ぐらいの女の主人がいた。この人は非常な病氣持ちなようなんだけど、難儀してるようだけれども、一所懸命自分たちのために家事を整えたり、世話をしてくれると。非常に親切丁寧な人だと言ってるわけです。真ん中三行目辺り。非常に親切丁寧の天性であると、良い性格の人だなあと。で、感動しましたと言ってるわけです、本人。これ、日記ですから、自分が思ったとおりに書いてるんですね、森が。この人は、われわれに話をしたという、こういうふうな話をしてる。「まあ旅の途中でいろいろ不自由でしょう」と。しかも、日本から来たと言ったんだと思います。「そんな遠くの日本から来たのだったならば、なおさらだから、少しでも不満足なことがあったら、必ず言うて下さいね」と、「努力だけは、いろいろ、まあ力だけは尽くしましょう」と。「実は人間の世の中というのは、交わりというのはお互いに助け合ってるのが、われわれの考えだ」と。「人も己も隔てなくするのが、すなわち上帝の」っていう、上帝は神です。一番最後の行です。「上帝のこの人間ばかりを他の物と異なっかかる霊物を生かしめたまいし、御意」、そういうご意思であるという心情を明かして語られたと。

で、その後なんですね。それだけ正直な人物にして、一方には耶蘇教(やそきょう)を信心して鬼神の説を説くほど、甚だ切ない。おかしいなという、彼の初めての、もちろんキリスト教は知ってるんですけども、初めて実体験としてのキリスト教というものは、いかなるものかというのを経験したときの彼の心情が、そのままつづられている部分です。ですから、そういうふうなことを言って親切にしてくれるんだけど、一方で、こうやって何か神のことを説いて、そうするのが神だっていう・・・「うーん」っていうことで、正直な人物なのに、なぜ、こんな心境を語るのか。

ここで、森は、初めて、解説文の僕が書いてる真ん中辺りです。「森は初めて、西洋人の人倫観の中に、儒教的な名文秩序とは全く異なる、人間が人間として、世俗的価値の如何を問わずに尊重されるエトスが存在していることに気付かされる。しかし、そのエトスを根底で支えているものがキリスト教信仰であることは気付いていない」と、そういう、まず衝撃を受けました。

二番目の衝撃が何かというと、そこに続いて今度、ちょっと書いてるのがありますけども、聾啞院と盲院という、その二つの障害学校を見学した時の衝撃を語っているんです。このときに、まず、聾啞人教育というものは何なんだと書いてあります。実はこれは手術(てじゅつ)で行う・・・手術(てじゅつ)って何かというと、これは手話のことなんですが、もう既にイギリスでは手話、手話といっても今の手話とは全然違いますんですけども、手を使って言葉にしたようです。僕もよく分かりません、ここは。彼は手術(てじゅつ)というふうに書いてます。例えば、エというのはAです。エーの字は大指だと、それからビーの字は指をもってピの字をつくって、そのようにしてアルファベット26文字を全部つくってあると。それで万事、通じないことはないんだという。そこで奇哉(きかな) 奇哉奇哉というふうな、3つ並べてるというのは、実に驚いたわけです。そんなことができるのかという話です。

それから、このところでは、目の見えない人がいまして、そこでも実は盲人の教育とは何かというと、文字だけを板を高くして、指先でなで回して便ずるようにこしらえて、いかなる書でも盲人が分かるようにして作ってあると。つまり、点字の最初です。これをもう既にイギリスはやっているんだと。で、いや、知らないですよ、もちろん森はそんなこと知らないんですけども、そういうことは何となく本では読んだらしいです。でも実際見て、ものすごくびっくりするわけです。なるほどと言うほど。

それで、最後に、もう一つ驚いたことは、教えるだけじゃなくって、男性へは、かめのような籠とかむしろを織る、それから縄よりなどの仕事を教えていると。女性へは、糸よりとか縫い物とか、そういう仕事を教えている。目が見えない人たちに。「めくらの仕事におのずから生涯」、まあ常人の、健常者の手仕事とは全然違うけれども、でも非常にうまいと。その事実に驚く。その後が、彼独特の言葉で「むべなるかな、西洋の開盛なる事」。ここが重要なポイントなんですけど、「なるほど、西洋が開けてるというのは、こういうことか」。つまり、今までは西洋の技術が優れているとか、軍勢力が優れているとか、そういうところで見えてきたけれど、なるほど、こういうことが西洋の優れたことなんだと気付いたと言うんですね。「かかる聾啞盲等の人をもついに捨てず、よく人間の事を教えわきまえて、生活を安く保たしむる」と、生活させることができるっていうのは、ちょっとは知っていたんだけど、日本で聞いたことがあるけども、こんなこと信じていなかったと。で、一番最後のところにある「今、現然



これを見て感驚(かんきょう)ほとんど記し難し」というわけです。今、目の前に、そういう様子を見て、私はあまりの驚きに記すことができない。あまりの、この素晴らしさにという考え。こういうショックが彼を教育に導く一つの動機になるわけです。

ですから、ここにはやっぱりキリスト教のそういう教育、福祉教育も含めて、そのエトスをちゃんと理解したわけです、ここに至って。キリスト教そのものを信じるというよりも、そのキリスト教の根底にある精神を、このときに感じ取り始めているということであると、そう思ってください。次にロシアにおける体験と衝撃の話をします。「われかつて聞けり」というところがあるんですけども、これも実は何を言っているかという、ロシアでは私生児が多いという話なんです。捨て子が多いという話なんですけども、それをよく見ると私生児だと。それで、そういう人間がどうしてできるのかということを考えてみたら、どうも捨て子院というのをつくっているという話が出てくるし、それからいろいろ書いてありまして、森が考えたことです。この2行目ですか、「人の大倫を乱る事、またいかんともなし難し」ということ、つまり、そういうことは夫婦の別というものを乱すものではないのかと。

夫婦の別というとし難いんですけども、実は儒教の中に五倫の教えというのがありまして、その中の日本の儒教倫理の中では、夫婦の別というのがありますから、長幼の序とか、いろいろあります。その夫婦の別という、夫婦というのは、それぞれのおのずと役割分担があるんだという考え方、それによって人倫秩序があるという考え方なんです、それが乱れてしまうじゃないかという話なんです、要するに。ですから、その結果ロシアのように、捨て子つまり、私生児が生まれて、それを捨て子にしてしまうというようなことがあるというような話を書いてありまして。面白いのは、自分が二十歳(はたち)になっても、まだその辺りのことがよく分からないのが非常に残念だっというようなことを言うんですけども、とにかく彼は十八歳です、まだ。十八歳でそうした非常に奥深いところまで考えていたということです。その辺りは読んでいただければいいと思います。そんなような人倫性、この夫婦の別という問題が後に、有名な『妻妾論』というものに、明治になってから結実をしていきます。『妻妾論』というのは、日本における奥さんと妾が同居するような、おかしい社会というのは早くやめるべきだということを言うんですけども、これも当時は当たり前のような社会の中で突然それを言い出すということの基本がそこに書いてあるということです。

そうして、いろいろ勉強しましたところ、そこに書いてあります「弱肉強食的な体質批判」というと、これ何ページになりますか・・・1、2、3、後ろのほうにありますね。資料四というのがあります。「弱肉強食的な体質を批判する」というところ。英国に來まして二年目になりましたときに、森有礼ほか留学生が「建白書」というのを薩摩藩庁に出すんです。それは何かといいますと、英国に来て、いろいろなことにもち



ろんびっくりもしたんだけど、実は英国、西洋というのは、弱肉強食ということで道義を忘れて植民地政策を行っているということに対して、今度は政治的な批判を始めるわけです。この政治的な批判の裏には何があるかということ、キリスト教精神を説いたローレンス・オリファントという外交官であり、国会議員であった人がいるんですけども、この精神から、このオリファントという人が「今の世界というのは、ヨーロッパがやたらに権力、まあ力づくで、アジアその他、弱い国々を植民地化しているけど、これは本来のキリスト教の精神からは離れているんだ」ということを言う。まさにそのとおりだということで、ここで政治的な意味で、批判をするという精神を学んだということになります。

ですから、人間性の尊厳であるとか人倫秩序があるとかというのが文明国であると同時に、国際関係でも国際的な道義は必要なのに、どうしてこうなんだというふうに考えるわけです。おかしいじゃないかというふうに。つまり、そういう政治性の中に矛盾が・・・政治と、それからそういったキリスト教精神の矛盾がここに表れているだろうということで、「だから帝国主義的侵略行為は文明国のやることではない」と言ったということです。そういうふうな考えを森は考えておったということになります。

これが、さらに大きく飛躍するのがアメリカに渡ってからでした。森は2年間イギリスで暮らし、1867年にアメリカに渡りまして、トーマス・レイク・ハリスという宗教家のコロニーに入ります。一年間暮らします。トーマス・レイク・ハリスという人は、ただし、これは牧師なんですけども、彼は神秘主義者でして、当時のユートピア的な共同体というものは結構、アメリカのニューイングランド地方には多かったんですが、そのニューイングランドにいくつかあるユートピア共同体のようなものの一つだと考えられています。そういうハリスという宗教家のコロニーに入りまして、そこで実際に労働体験をしながら、神というものを理解していく。つまり人間というのは働いて、そして神に近づくんだという考え方。働きながら自己を犠牲にしてということと、もう一つは自分というものを捨てて。滅私奉公とは違うんですね。日本でいう滅私奉公と。つまり、自分、自己を捨てて、そして神に奉仕することによって初めてキリスト教の精神は理解できると。そして、神に近づくことによって国そのものも新しくなるんだという考え方を学び出すものですから、森はそこでキリスト教という精神を・・・精神だけなんですけど、取りあえずは、自分の考えてるキリスト教の精神を学ぶことによって、人間を再生させて日本を文明国に導いたらどうなのかというような考え方を持ったのではないかな。基本的には、先ほどのイギリスの思想と同じような考えをアメリカでも持つ。それをさらに深めていく。そういう考え方であろうということです。

で、No. 3と書いてあるところに、ちょっと最後に書いてありますけども、「倫理的使命感に支えられた、無欲無私の熱い祖国愛だ」という考え方、つまりさっき一番最

初に言いましたように、祖国をどうすれば新しい国につくり替えられるのかという、その質問に対して彼は答えを見いだしたわけです。こういうことで、つくり替えることができるのではないかという、そのキリスト教の精神というふうになります。後ほど明らかになりますけども、この彼が学んだトーマス・レイク・ハリスの宗教というのは、多少、先ほど言った正統派のプロテスタントの各会派とはちょっと違うんですが、後、段々とニューイングランドのいわゆる、先ほど言いました会衆派といわれる、Congregationalといいますね、このCongregational churchと同じ考え方に近づいていきます。これは後ほど分かるとは思いますけれども、これは新島襄と同じ考え方に基づくものというふうになります。つまり、教育というものの基本に、キリスト教の精神が出てくるわけです。

そうして、とにかく彼がアメリカを去ったのが、1868年、明治元年という年があります。そして祖国に帰ってまいりまして、すぐ新政府に入ります。新政府の、もうかなり上の役人に、まだ22～23歳でトップになる。これは岩倉具視とか大久保利通の推薦がありまして、すぐに、そういう新政府のトップのほうに迎えられる。つまり国際派として、もちろん英語はもう日本語以上にできるという、まあほとんど同じレベルでできる人間でしたもんですから、めったにいない新政府の中の貴重な人材として活用されるようになってきます。

### 3. 新島襄の米国留学とキリスト教

そして三番目でございますが、新島襄のほうに移りたいと思います。二枚目のほうの『新島襄の生涯と手紙』というのがございます。森は、こうして最初キリスト教と衝撃的な出会いをして、そしてイギリス、アメリカと渡って行ったわけですが、新島襄というのは、どうしてキリスト教と出会って、留学をしたのかという話に入りたいと思います。森と決定的に違うのは、留学をする、つまり密航留学なんですけど、両方とも。つまり、鎖国時代に海外に渡りますから、森にしても新島にしても密航です。幕府に隠れて、命懸けで渡るわけです。ただ、両者違うところは、新島は最初っからキリスト教を学ぶためにアメリカに渡ります。どうしてかといいますと、ここに書いてありますように漢訳聖書との出会いというのが、彼に決定的な影響を与えることになります。これは皆さんのお手元に配りました、生涯と手紙の中に一番最初を見ていただければ。これは読みやすいから読まないでも分かんと思います。彼も最初、洋学から入るわけです。西洋の学問がしたいと。

いろんな勉強をするわけなんですけども、ちょっと傍線引っ張ってありますけど、『ロビンソン・クルーソー』の日本語訳があったんです。外国を訪れてみたい欲望という話を書いてありますけども、『ロビンソン・クルーソー』なんていうのは、その頃、あっ

たのかと思うかもしれませんが、実はこれはオランダ語訳からのなんです。つまり、英語をオランダ語に訳し直して、それをさらに日本語に訳したのがありまして、『漂荒記事』という題になってます。これは黒田麴慮という人が訳したんですけれども、そういう『ロビンソン・クルーソー』の話が出てるんです。それをもう既に読んでいて、大変面白かったので、西洋に興味をもったようです。

もう1つは、ブリッジマンという伝道の宣教師が書いた合衆国の歴史・地理の書物でした。これはアメリカの歴史・地理で『連邦史略』というのがあるんですけど、その『連邦史略』というものを讀んだんです。この『連邦史略』というのは、当時の幕末の志士が競って讀んだ本の一つです。これはもともとは『海国図志』といまして、非常に膨大な本なんです。各世界地理、歴史で『海国図志』というのがあるんですけど、この『海国図志』の中の一部のアメリカ合衆国の地理・歴史、『連邦史略』と、それから、キリスト教の本を二・三冊讀んだようです。

それで、次の裏ページを見てください。そういう本を讀んでいく中で、「同じ書物から私は神の別の名前が『天父』であることを知り、そのことは私の内部に神に対するさらに大きな尊崇の念をかきたてた。なぜなら、私にとって神は単なる世界の創り主以上のものだったからである」という気持ちになってきます。それで、この天父という言葉を知ってから、自分は新しい決意を持ったということで、ここがすごいところなんですけども、新島はこういいます。「私は、地上の両親よりも一層天の御父に仕えなければならぬ。この新しい考えが私を力づけ、私は断然藩主を見捨て、また一時的に家をも祖国をも離れる決意をしたのだ」。これほど素晴らしいことを考えるわけです。

つまり、日本の国をつくり替えるっていう、これが基本ですよ。つくり替えるにはどうしたらいいのかと。今のままの日本では駄目だろうと思ってたところで、洋学を勉強してきましたと。西洋の学問を。でも、やっぱり・・・この人もやっぱり海軍を勉強するんです。航海学。勝海舟や何かのところに、塾に入って一所懸命、海軍の航海学の勉強をするんです。で、技術を學んでいくんですけども、そのうちに、今言ったように、当時キリスト教のひそかなサークルが幕臣の中にあつたようで、そのサークルに入るんです。そこで、この書物と出會って、言葉を知ってこういうふうになっていく。これはもう天性のものだと思います。森や何かの考え方と全く違ふんです。もう既にこの時点で。

ということで、彼は決意をして、どうしても渡るんだと、海外に行くんだということでチャンスを狙って、最初は函館に行きまして、そこで東京神田のニコライ堂で有名なギリシャ正教のニコライという司祭に出會って、彼に日本語を教える代わりに英語を教えてもらうというようなことでやるうちに、近日中にアメリカに行く船があるというので、それに乗り込むという、そんなふうなことです。

そうして、新島はアメリカに留学をしました。1864年ですから、森より一年前です。1864年の6月に函館を出帆します。ひそかに。アメリカの商船でありますベルリン号に乗ります。それで、とにかく日本の近代化を、日本の国をつくり替えるんだという志一つでアメリカにむかいます。そして、約一年ぐらいたって着くんですが、その前にちょっと、もう一つ話がございます。香港で、別のアメリカの商船に乗り換えるんです。ワイルド・ローバー号という。そのときにテラーという船長から聖書をもらおう。自分でも聖書を買うんですけど、そのテラー船長から聖書をもらいまして、それを読むんです。かなり、もう英語ができるようになってました。彼自身が書いているのですが、ヨハネ伝の3章16節というのが非常に心に響いたということであります。これはもう、ご専門の皆さんには言わずもがななんですけども、当時の言葉ではこうなってます。「それ神は、その独り子を賜う(たまう)ほどに、この世を愛したまえり。全て神を信ずる者の滅びずして永遠の命を得んために」、実は、国家をつくり替える、国家を近代化させるといふ目的といふか精神は、ヨハネ伝の3章16節が彼の精神の中核にあったといわれています。

一年後の1865年の7月にボストンに到着しました。ボストンに到着しまして、当時のニューイングランドにおける宗教的な雰囲気の中に入っていくわけであります。当時のニューイングランドは、南北戦争後の北軍の勝利で、専門の方はよくご存じのように金メッキ時代といわれまして、ピューリタニズムが徐々に支配力を失っていく時代であります。ヒューマニズムであるとかデモクラシーというのは、どんどん大きく支配的になるんですけども、キリスト教的なピューリタニズムの精神が衰え始めるという時代になっていたんですが、ただ、彼が出会った、次のハーディーという、ここに書いてないんですけど、船主というんでしょうか、そのボストンにいるワイルド・ローバー号の船主です。そのハーディー夫妻に会ってから、彼の生活・生涯というのがさらに決定されていく。そのハーディー夫妻という人たちは、先ほど言いました会衆派の人たちですから、この会衆派のハーディー夫妻が、「それではそういう理由で密航したと言うのであれば、私はあなたを、そうした学校に進学させるように世話をしよう」と言って新島の一途な気持ちに大変心を打たれるわけです。それで、自分自身が理事を務めていたフィリップスアカデミーという高校に入学をさせます。

フィリップスアカデミーに入りましてから、そこで初歩的ないろいろな勉強をして、そして1867年、二年後に卒業します。その卒業直前ですけども、洗礼を受けるんです。アンドーヴァー神学校というのがフィリップスアカデミーと同じ所にありまして、そのアンドーヴァー神学校付属のチャペルで洗礼を受けたのが、1866年12月です。このアンドーヴァー神学校というのは、まさにピューリタニズムの正統なニューイングランド神学校です。それを顕示していた神学校ですので、そこで洗礼を受けたこと

は、新島がその後、そこの正統な神学を受け継ぐ宣教師になることは、もう道が引かれていたようなものになります。そして、神学校に入る前に彼はアーモスト大学というところで、まさに幕末にやってきた米国の宣教師と同じように、リベラルエデュケーションを受けるわけです。これが大事なんです。やはり、その神学の前に、このリベラルエデュケーションを受けるということによって、彼の人間の幅が大きく広がっていくことになります。

フリントという、牧師の友人がおりまして、その友人がフリント夫妻といいますけど、これが同じ下宿に住んでいた夫婦の神学生なんです。フリント夫妻の影響で受洗もし、そしてアーモスト大学にも入るわけであります。そのアーモスト大学に入るときに、シーリーという教授に新島の紹介状を書いてるんですが、それをちょっと見ていただきと思います。これがNo. 2 という次のページのところにあり「彼はあなたのご指導の下に精神と道徳の哲学を学びたいと熱心に希望しています」うんぬんという書いてあります。「私たちはジョゼフの精神的、徳性的な発展に強烈な興味と最大の喜びをもって」うんぬんと書いてあります。

それで、ジョゼフと書いてありますが、実は、新島はアメリカに来てからジョゼフといいました。本来の名前は七五三太(しめた)というんですけども。全然違いますよね。しめたというのは七五三(しちごさん)と書きまして、これでしめたと読むんです。自分を、ジョゼフ・ハーディー・ニイシマと書きます。ハーディーというのは、世話になったハーディー夫妻のハーディーを取ったんですね。ジョゼフ・ハーディー・ニイシマっていうふうにしまして、それで、日本に帰ってきてからは漢字で裏(ジョー)にしました。

そこに「この若い日本人の、光と真理に対する渴望はあまりにも強烈であり、彼が祖国と家を飛び出した状況は劇的な出来事に満ちていた」と書いてあります。これを書いている人はアーサー・ハーディーといいまして、ハーディー夫妻の息子なんです。それが当時、新島襄の生き方に非常に興味を覚えて、丹念に生涯を、手紙、史料をきちんと整理をして、臆測とかじゃなくって、彼の言葉とそれから手紙と、それを基に伝記を書きました。これは最も信ぴょう性のある伝記と言われています。

そして、彼がいろいろと、ここで書いてありますようなリベラルエデュケーションを受けることになるんですが、このリベラルエデュケーションというものの内容もいろいろありますんですけど、ここだけ、ちょっと森との関連で話をさせておいていただきたいと思うんですけども。このリベラルエデュケーションの重要なポイントは、ピューリタンのだというのはもちろんありますが、知・徳・体という、これが基本にあって、知育・徳育・体育と、よくいわれますよね。これがまさに調和的な発展を目指したりベラルエデュケーションに重点を置かれた、そういう大なるものでした。彼ら

がそれを受けることによって問題意識を持って、そして将来の自分の設計図を描くんだという考えの下での人間教育を行うことで有名な大学だったんです、アーモスト大学は。ですから、教育の目的は教養ある人間のうちに人間の最高の品位を生み出すことであるというのが、最初にある。そして、それをどうやってやるのかというと、肉体的、知的、道徳的、宗教的に、これを教えていかなければいけないんだということを実践していった大学なんです。それをまさに身をもって体験をしまして、1870年に卒業します。卒業になるときに、また、これは面白いんですが、彼は理学士という、Bachelor of Scienceを取るんです。それもまた、すごいところだと思います。珍しいそうです。内村鑑三が、やっぱり1887年にBachelor of Scienceを取っています。

#### 4. 森と新島の米国における出会い

新島は、その後アンドーヴァーの神学校に入ります。1870年の9月に入ります。ここでニューイングランド神学を学んでいくということになります。彼の考え方の中には、やっぱり、Conscientiousといいましょうか、そういった自由および良心の概念というのが大きなウエートを占めてまいります。そして、いわゆるCongregational Churchの精神を重視して、これを教育の中に体现していこうというふうになるわけです。

そう考えて神学校に入ってすぐの頃に、今度は、先ほどの森有礼が新政府の最初的外交官としてワシントンに赴任してくるわけであります。これがまた劇的な出会いなんです。森有礼は最初のワシントンの駐米公使という形で来るわけです。1870年の12月に横浜を出帆した森が1871年の3月にワシントンに着くのですが、そのワシントンに着く途中でボストンで、彼の日記に書いてあるんですけども、新島の手紙にも出てくるんですが、3月16日に森が新島と会うわけです。そして新島に「お前がもし帰国の意志があるならば、パスポートが得られるように日本政府へ斡旋しよう」と。で、キリスト教に関する現在の日本の政府高官の動きを詳細に聞かせるわけです。「こういうことになってるけど、日本は。でも、あなたが、もしも帰ろうという意志があるならば、自分が率先してパスポートを」、つまり今は密航の状態ですから、帰れないんです。ですから、森が、ここで政府高官として、公使としてかけ合えば政府は出してくれるという、どうするかと訊くわけです。そしたら、ぜひ、そうしてほしいという話になるわけであります。

No. 4のところで、アンドーヴァーで1871年3月21日付けの、新島のプリント夫人あての手紙の中に「先週の水曜日に、ミカドからワシントンに派遣されている日本の公使、森にボストンで会いました。彼が申しますには、もし私が日本政府あてに手紙を書いて、私が何者でアメリカで何を勉強しているか、また私に帰国の意志があるこ

と等を簡単に記すならば、その手紙を政府に転送して旅券を取得してあげよう」というふうに行ったと、書いてます。実際にこういうことが起きているんだという話。その後にお金の問題が出てくるんですけど、「森に対して、その支払いをなされば、私はそのお金によって日本政府に縛られることになる。私としては、むしろ自由な日本市民としてとどまり、全力をあげて主の御用のために献身したいのです」というふうに行ったという、これはまた読んでいただければいいと思います。そういう新島の行動があったということでもあります。

そうしましたら、再び森から来るようにということになり、これが次の手紙であります。6月7日付け。アーモストに来るように。そこで、森公使はマサチューセッツ農科大学でアメリカ式の農業うんぬんを書いてありますけども、実は、これも話をすると時間がなくなってしまいますけど、マサチューセッツ農科大学の当時の学長がクラーク博士なんです。で、マサチューセッツ農科大学のクラーク博士が森と会っているわけです。なぜ、森とクラーク博士が会うかっていいますと、森はアメリカの当時の、今でいう国務長官ですけども、国務長官のフィッシュという人に依頼して、日本の開拓をするために、ケブロンという人を紹介されるんです。ケブロンは農務長官ですけど、そのケブロンという農務長官を日本のお雇いとして派遣してもらう契約をする。ケブロンは今度は、森の要請に応じて、「それじゃあ、あんたに、いい学者を紹介しよう」と言って、マサチューセッツ農科大学の学長を紹介してくれるんです。そこに行きますと、クラークが出てくるわけです。クラークと話をして、マサチューセッツ農科大学の大学経営方法を見ていて、これこそ日本が必要な大学だと思うんです。これはどうしてかという、体育をしているんです。体育というものが大事なんだと。知育・徳育のほかにも体育がいかに大事かということを考えて、そして、この農科大学のクラークを、ぜひ、日本に招きたい。で、クラークと意気投合しまして、クラークが「行くよ」と言って札幌に来る、こういうふうになっています。ですから、要所要所で全部、森が関係してるんですけども、そこをほとんどの方が知りません。クラークが、森の要請によって北海道に来たということになります。

そこで新島に戻るんですが、キリスト教大学の設立というのを、ここで初めて新島が考えたという話になります。これはいつかといいますと、新島は1874年の7月で卒業しました。明治7年の7月です。31歳になっていました。もう足掛け何年ですか、これで。もう十年近い留学ですよ。それで、神学校を卒業した年の10月にアメリカンボード、先ほど言いました会衆派の基になる伝道会社ですけども、アメリカンボードの年次大会で宣言するんです。みんなの前で。「私は、これから祖国にキリスト教主義の大学を創り、自治自立の人民を育成すると。このことこそ神の召命に応じ祖国に報いることになる」と考えて」と言って聴衆に対して大学設立のための募金を訴えたと



いうことになっています。こうして彼の、まさに学校設立のための運動が始まってまいります。

そして、この卒業する三カ月前の4月に、彼はアメリカンボードの宣教師補という地位を手に入れます。すなわち認められたわけです。宣教師としての資格を認められて、この資格においてキリスト教の真理を同胞に伝えると同時に教育と教化という二つの面から祖国に貢献することを誓いました。こうして、1874年の11月に、10年4カ月ぶりで日本に帰ってまいります。この後明治8年に彼は同志社の英学校を京都に創ることになります。これも不思議なことに、同志社の場所は、元の薩摩藩邸があった所です。薩摩藩邸があった所が同志社の敷地になる。

## 5. 森の教育思想とその実践

『EDUCATION IN JAPAN』という森の資料を見ていただきたい。四行目、ちょっと読みにくいと思いますが、こう書いてあります。What will a man give in exchange for his soul? New Testamentと書いてあります。つまり、『EDUCATION IN JAPAN』という、この本を出版するに当たって、彼は新約聖書の「人は、どんな対価を払って、自分の魂を買い戻すことができようか」という言葉を表紙に載せました。これは非常に難しい。なぜ、これを書いたのかは分からないんですけども、恐らく自分の国家に対する教育、国家というものあるいは国民を教育するということに対しての彼の決意を、ここで述べたんだろうと思われるしております。『EDUCATION IN JAPAN』というのは、ADDRESSED BY PROMINENT AMERICANS TO ARINORI MORIで分かりますように森有礼に対してアメリカの知識人、著名人から宛てられた手紙の回答を寄せ集めた15人ほどの蒼々(そうそう)たるメンバーからの教育の内容を書いたものなんですけども。

そこで、どういうことを書いて聞いたのかということなんですけれども、日本における教育について、どういうことを、アメリカの著名人に聞いているのかというと、「私は貴国における義務の一端として、日本の教育問題を研究する特別な任務を帯びています。また、個人的にも日本帝国の発展に非常な関心を持っているところから、この問題について貴下の助言と情報のご返事を頂き、わが国民が自分の力で東洋文明の促進に役立つことができるようにしたいのです。総じて、知的、道徳的、身体的に日本の水準を高めることについて、ご教示願いたく、次の諸点」というのは、ちょっと消えているので申し上げますと、まず「次の諸点についての教育効果はどうか」というふうに書き出しまして、1番目、一国の物質的な繁栄に対して。2番目が一国の商業に対して。3番目が一国の農業上、工業上の利益に対して。よろしいでしょうか。1が一国の物質的繁栄、2が一国の商業に対して、3番目が一国の農業上、工業上の利益に対して。4番目が国民の社会的、道徳的、身体的状態に対して。5番目が法律と政

治への影響について。全てに渡って、教育がどういう効果を与えるのかということ、あなた方に聞きたいと言って、アメリカの教育上のトップクラスの人々に尋ねています。

それに対して彼が、これを基にいろんな教育の問題を考えようとしたことが分かるということでもあります。基本にあるのは、今言ったキリスト教的な精神を基に、こうしたものを考えていきますので、先ほどお話しした知的・道徳的・身体的というのは、会衆派のアーモスト大学と同じ考え方、日本でもそれは当然基本的な教育姿勢といいますけども、ただ、森の場合は、この身体的というところに、すぐく重点を置いているんですね。ですから、皆さん、あまりご存じないかもしれませんが、例えば身体検査というものは必ず年一回するんだという、これは森が考え出した方法です。身体検査という考え方。それから、運動会、修学旅行という、いわゆる外で体を鍛えながら勉強するんだという考え方。これはほとんどアメリカやイギリスでのスポーツであるとか、そういうものから学んで、近代的な体育の概念を取り入れてきたということだと思います。

最後に、幼稚園教育という、これも知られていないものですから、ちょっとこれだけ言わせていただきます。もちろん同志社英学校への支援というのは、もう積極的にやっていますから、言わずもがななんですけど、これは、もう省略といたしまして。最後に幼稚園教育という、意外とこれは最近分かってきた問題です。私の研究仲間、幼稚園教育の専門家がおまして、その方のアメリカでの調査で分かってきたことなんですけども、実は幼稚園教育というのは、当時のアメリカでは、エリザベス・ピーボディという人が・・・当時は全米で1873年頃にはもう42くらい幼稚園があったといわれているんですけども、このピーボディという人が1860年にボストンでアメリカで最初の英語による幼稚園を開設した女性として有名なんです。このピーボディという人が、世界初の幼稚園専門月刊誌をアメリカで発行する。もともと幼稚園はドイツで発展するんですけど、アメリカで取り入れたのはちょっと遅れているんですね。『Kindergarten Messenger』というのを発行するんですけど、このエリザベス・ピーボディという女性と森は非常に接触が頻繁になっていくんです。

このエリザベス・ピーボディの妹が二人おまして、一人がメアリーといいまして、公教育で有名なホールス・マンの奥さんです。それから、一番下の妹のソフィアというのが、ナサニエル・ホーソーンのおさんなんです。ピーボディ・シスターズといわれた人たちなんですけども、その幼稚園教育の先駆者であるエリザベス・ピーボディとかなり接触しているという事実が、いろいろな面から、今、分かってきております。それで、森が、この『Kindergarten Messenger』の月刊誌の有力な購読者になるらしいという情報を仕入れて、非常に喜んでいるという手紙も残っている。つまり、森が大

変幼稚園教育に関心を示したということが分かります。それから有名な津田梅子たち、いわゆる五人の最初的女子留学生を世話したのは森ですから、7歳から14歳までの少女たちを預かって、彼女たちにどういう教育をしたらいいかということに大変骨を折ります。そのときに、まず森が彼女たち五人を一つ所に住ませ、そして共同生活をさせるんですが、そのときに付けたのが幼稚園の教師だったといえます。彼女たちを教えたのが、アメリカの幼稚園の教師だということを、留学生の一人である永井繁子という、後に音楽学校・・・最初のピアニストといわれる永井繁子という人が、自分の回顧録の中で言っております。「森は大いに幼稚園教育に関心を示していた。五人と一緒に暮らしていたときは、毎日幼稚園教師が教えに来ていた」ということを書いております。

五人のうち残って最後まで十年間留学していたのが津田梅子、山川捨松と永井繁子の三人であります。山川は、ご存じのように会津の、今、大河ドラマで出てくる山川大蔵という人がお兄さんで。一番下の末っ子で、この間、大河ドラマ見てましたらば、赤んぼで山川咲というのがいるんですけど、これが山川捨松という名前になりまして、のちにこの女子留学生の一人になります。後に大山夫人になるんです。大山巖の。永井繁子は東京の今の芸大の、日本人で最初の音楽教授になる人で、これはヴァッサー・カレッジの音楽科を出まして、日本に戻ってまいります。これについても大変面白い話がたくさんありまして、とにかく三人共に、特に永井繁子と津田梅子は全然、日本語ができなくなります。全く英語しか話せないという状態になって帰ってきます。

とにかく、彼女たちは、アメリカで非常に自由な勉強をしたといわれていまして、進歩的で知的な課程で教育を受けさせてもらったということで、今まで日本で受けたような保守的な女子教育観ではない、自由、進歩的、そういう教育の中で育ったものですから、彼らはそのまま女子教育の本来の素晴らしい面を持ち帰って、日本の中の教育に役立てていくということになるんですけども、その基になっていたのが森の教育の仕方であったといわれます。そうした自由な雰囲気の中で、彼女たちを教育させようという方針に基づいていたということで、この辺りは実は、先ほど言ったような森の留学時代の経験が大きくものを言っているということになると思います。

森と新島教育思想の共通点は、だいたいお話したことで分かりますが、二人共、非常に似かよった教育思想の持ち主だったと思います。大河ドラマの話を最後にしますが、八重というのは、大河ドラマに出てくる川崎尚之助と結婚するんです。川崎がちょっと忘れちゃったけど、別れる、死ぬんだったかな、とにかく一人になります。八重が一人になったときに、山本覚馬というお兄さんが幕末に病気になるしまして、京都で身体不自由になります。目も見えなくなります。そのまま京都に残るんですけども、京都府の当時の知事が山本の知識を見込んで、顧問になってくれということで、

京都府の顧問でいろいろな政策を採るんですけども、そのお兄さんの世話のために京都に八重が来るんです。

山本覚馬というのは、もう、その頃には洗礼は受けていたか、ちょっとそこは忘れましたが、キリスト教の信者として新島と同じような考え方で動いてたもんですから、そこで新島が明治7年に帰ってきたときに、山本覚馬と、すぐに意気投合するという形になっていくんです。山本覚馬が同志社の設立に奔走するんですね。京都府の役人ですから。で、同志社の敷地もいろいろ捜してくれるとかっていうこともありまして、八重はお兄さんの世話で来てたんですけども、そこで新島と知り合って、彼の奥さんとしてそれからまた活躍をするという、そういう筋立てになるはずですよ。

とにかく森と新島というのは、同じキリスト教的思想で教育を行う人間なんですけども、受容の仕方は全く違ってたということが面白いし、新島はどちらかというと、幕府側の人ですよ。安中藩、江戸藩邸で生まれてますもんですから、それで薩摩の森とはお互い敵同士のような関係なんですけども、まさにアメリカでは、そういう藩も何もないわけでありまして、日本人として、あるいはキリスト教の考えに共鳴をした人がそこで出会って、協力して教育を行い、そして同志社を建てた新島の援助をしていく、そういうことになります。

幕末の留学生は、このほかにいっぱいおります。この二人は非常に有名なんですけれども、そのほかにも幕末に留学をした人たちが、向こうで洗礼を受けて日本でいろいろな活躍をしていきます。ですから、宣教師による活動のほかに実は、こうした留学生によるキリスト教の受容が教育面で大きな力を発揮していったと思います。